

国語科

I 表現意欲を喚起する作文教育の研究

——中学生・高校生に対する「聞き書き」の指導を通して——

米 山 誠

1 作文教育の実情と生徒の意識

(1) 作文教育の実情

作文教育の重要性は、学校関係においては無論のこと、また世間においても、すでに長年強調されつづけてきた。しかし一般的にみて、学校教育の中で十分な指導が実際に推進されているとは思われない。その重要性は痛感しながらも、時間、労力、予算、等の不備な条件下で、確信のもてない、試行錯誤的な苦勞をくり返している、これが多数教師の実情ではないだろうか。一方、指導される側の生徒たちは、学校での作文教育をどのように受けとめているのであろうか。

まず、名古屋大学4年生・30名（文科系男子7・女子7、理科系男子13・女子3）を対象としたアンケート（1975・10実施）、「これまでに学んだ各学校で、作文に関してどの程度指導されたと思うか」の結果を見よう。

	十分指導されたと思う	かなり指導されたと思う	あまり指導されなかったと思う	ほとんど指導されなかったと思う
小学校	4	8	13	5
中学校	2	11	9	8
高校	1	3	10	16
大学	0	2	5	23

数字を見て目立つのは、どの学校段階においても、「あまり」又は「ほとんど」指導されなかったと思ふ者が、「十分」又は「かなり」指導されたと思ふ者よりも多いこと、そして、小・中学校と高校・大学との間に大きな落差のあること、この2点である。

次に、名古屋大学附属高校3年生91名（男子53・女子38）を対象とした同趣旨のアンケート（1973・1実施）の結果を並べて見てみよう。

	十分な指導を受けたと思う	指導を受けたが不十分だったと思う	ほとんど指導を受けなかったと思う
小学校	17	53	21
中学校	5	34	52
高校	1	8	82

ここでは、小学校・中学校・高校と段階が進むにつれて、指導らしい指導が次第になされなくなっていく

ような傾向、特に高校における極端に不振とも言えるような傾向が、一層鮮明に表われている。

ところで実際問題として、特に高校の場合、どの程度の指導が一般に行われているのであろうか。読書感想文、自由作文、レポート等いずれかの形で、主に宿題として作品を書かせ、提出させた全員の文章について、表現不備な点、誤字等の指摘訂正、また簡単な批評や評価の記入などをしたうえ返却する、こうした指導を年間2～3回実施する、この程度が精一杯のところと思われる。率直に言って、現在の教育条件の中では、この程度の指導であっても厳密に実施することは困難であり苦痛である。しかしながら、生徒たちの多くは、上記アンケートの結果を見ると、「指導された」という感じ方をしていないようである。では一体、こうした現状の指導と生徒たちの求める指導との差異はどこにあるのだろうか。私たちの指導において欠けているものは何なのかを探り明らかにする必要がある。

上記名大生対象の作文に関するアンケートにおいて、「中学・高校で受けた作文教育についての率直な感想・意見」として記入された回答の中からいくつかをとりあげよう。

○「私の場合、中・高ではほとんど作文というものを書いたことがない。読書感想文は書いたことがあるが、指導といっても全体的なものでなく、字句の訂正、表現上の訂正程度であった。」○「作文を感想文という形で書かされることは多々あったが、文章表現力の練習成果が上がるように指導された回数は少かった。」○「文学中心の国語教育では、中学生・高校生が良い文章とは文学的文章のことだと錯覚する。文章が書けないという心情の底にこのことがあると思う。」○「作文のテーマについては最も身近な書きやすいものがよいと思う。」○「とにかく書かせるチャンスを増やすこと、そしてより多くの本を読ませることが必要だ。」○「作文を提出して返してもらった時、赤インクで先生のことがいっぱい書いてあるのを読むのが楽しみだった。それが悪評でもうれしかった。漢字の誤りなどいっぱい添削してあるのも快かった。ただ評価が点数になっていて数字で書かれているのを見るのは不快だった。」○「作文の内容について評価はできないと思う。読む側に何かを伝えようとする熱意がうかがわれればよい

と思う。しかし何かを訴えようとしているにもかかわらず、表現方法のまずさなどが原因で難が見うけられる場合は、その点を指導すべきだと思う。自由作文を書くように言われると、何を書いたらよいかかわからないという場合があるが、そういう傾向こそ問題だと思う。難しいこととは思いますが、毎日の生活の中で、何かに心を動かされ、それを他人にも伝えたい、共有させたいという気持を養うことが作文指導以前の大きな問題としてあると思う。」

以上のような感想・意見を読むと、指導される側の

生徒の気持がかなり理解できてくる。要するに、数多くの機会を通じての、しかも多様な方法での指導が望まれているのである。ごく限られた回数で、また、納得のゆくような事前、事後の指導もせず、作文させている現状に対して反省せざるを得ない。

(2) 作文に対する中学生・高校生の意識

作文教育の実践に際しては、生徒の実態を知ることが必要である。次は、名古屋大学附属中学・高校の生徒を対象としたアンケート（1973・1実施）の結果である。

(B) 「作文に対してどの程度興味があるか」

	中1	中2	中3	計	高1	高2	高3	計
非常に興味がある	2 (29) %	4 (21) %	9 (30) %	15 (30) %	6 (31) %	3 (13) %	6 (18) %	15 (20) %
かなり興味がある	21	14	25	60	21	8	10	39
あまり興味がない	23 (46)	35 (75)	27 (58)	85 (58)	30 (60)	44 (85)	42 (76)	116 (74)
全然興味がない	14	29	17	60	23	29	27	79
わからない	20 (25)	3 (4)	6 (12)	29 (12)	7 (9)	2 (2)	6 (6)	15 (6)
生徒数	80	84	84	248	88	86	91	265

作文に対する「好き」「嫌い」という表現にすれば、「好き」な者は、中学全体で30%、高校全体で20%となり、「嫌い」な者は、中学全体で58%、高校全体で74%となる。

興味の有無についてその理由はそれぞれあるが、「興味がない」理由のみ、生徒のあげた主なものを簡単に記しておきたい。

○「書くのがめんどろだ」○「非常に時間がかかる」
 ○「文章としてまとめるのがむづかしい」○「どう書いていいかわからない」○「他人に読まれることが気にかかる」○「全然自信がない」○「何を書いているのか主題や材料に困る」等が、中学・高校ともに多かった。これらのことは、後述の「作文の困難点」と直結する問題である。

(B) 「作文学習の必要性を感じるか」

	中1	中2	中3	計	高1	高2	高3	計
非常に感ずる	11	8	18	137 (55%)	8	19	19	144 (54%)
かなり感ずる	38	18	44		23	39	36	
あまり感じない	28	32	18	111 (45%)	23	17	24	111 (42%)
ほとんど感じない	3	26	4		27	8	12	
わからない	0	0	0		7	3	0	(4%)
生徒数	80	84	84	248	88	86	91	265

(C) 「国語学習としての作文の回数は年間に何回程度を望むか」

	中1	中2	中3	計	高1	高2	高3	計
5回以上	13	15	35	63 (26%)	16	23	32	71 (27%)
3～4回	36	25	28	89 (36%)	23	35	19	77 (29%)
1～2回	23	26	18	67 (27%)	24	19	24	67 (25%)
0回	6	18	3	27 (11%)	19	6	11	36 (14%)
わからない	2	0	0	2	6	3	5	14 (5%)
生徒数	80	84	84	248	88	86	91	265

中学・高校とも、5回以上を望む者の数が全体として4割以上いるということ、また、その数が中学・高校とも、3年生に多いということが注目される。

以上の(A)(B)(C)の資料を通じて言えることは、中学・高校ともに、大多数の生徒は作文を好むという状況ではないが、しかし半数以上の生徒が作文学習の必要性は認めており、実際に書く機会も相当に多いことを望んでいるということである。こうした生徒の認識や希望をどのように活かして現実的に対応してゆくかということが教師の課題であるといえよう。

(D) 「作文に際してどんな点に困難を感じるか」

困難点と考えられる数々の事項を具体的に15項目あげ、その中から最も困難を感じるものを各自に選択させてみた。その結果、全体として選択した者の多かった数項目を順位によって列挙すると次のようになる。
 [中学生] ①「思うこと・考えることがあっても、なかなか文章の形にならない」②「文章が全体としてうまくまとまらない」③「書こうとすることの主題や内容が頭に浮かばない」④「主題を決めてもそれを表わすための題材に苦勞する」⑤「文章中の内容がうまく順序立てられない」⑥「文章の書き出しがむずかしい」⑦「文章の結びがむずかしい」(以下略)

[高校生] ①②③は中学生と同じ。④「文章の書き出しがむずかしい」⑤「主題を決めてもそれを表わすための題材に苦勞する」⑥「文章中の内容がうまく順序立てられない」⑦「ことばの知識が乏しい」(以下略)
 逆に、選択した者の特に少なかった項目を参考のために挙げてみると、○「文法的にまちがいがやすい」○「かなづかい、送りがながむずかしい」○「句読点の適切なつけ方がわからない」等である。

要するに、中学・高校とも、多数の生徒にとって最も困難と感じられているのは、第一に構想に関する事項、第二に主題・題材に関する事項ということになる。なお、中学・高校生の資料に関連させて、大学生(先述の名大生)が「自分の作文力において特に弱点と思われることは何か」というアンケートに対して答えたものを2・3紹介してみよう。

○「論理的に順序づけられた展開ができなくて飛躍しがちになる」○「全体的に読み返すとチグハグな感じの箇所が目立つ」○「一旦書き出すと止まらなくなり、結論的に収拾がつかなくて、最後の方になると、何を言いたいのか支離滅裂になってしまう」等。

この類の答えが最も多かったが、これらもやはり構想や主題に関する問題である。顧みて、私たちの実際の指導において、はたして構想、主題、題材に関して力を注いでいるといえるだろうか。むしろ表記上の細かい事項に心を配っていることの方が多くを反省させられるのである。生徒たちの作文ぎらいの理由として、「めんどうだ」「時間がかかる」などが多かったことを前に記したが、これも実は構想のむずかしさの問題とみてよいであろう。

(E) 「どんな種類の文章が書きやすいと思われるか」

学年により差異はあるが、中学・高校それぞれ全体を男女別にまとめ、選んだ人数の多かった順位に従って、文章の種類を配列してみよう。

[中学生] (男子) ①旅行記②随筆③評論③記録⑤報告説明⑥小説⑦詩⑧俳句⑨手紙⑩短歌 (女子) ①詩②手紙③随筆④旅行記⑤小説⑥報告・説明⑦評論⑧記録⑨俳句⑩短歌

[高校生] (男子) ①随筆②評論③旅行記④報告・説明⑤手紙⑥記録⑦小説⑧詩⑨短歌⑩俳句 (女子) ①手紙②随筆③評論④旅行記⑤詩⑥小説⑥報告・説明⑧記録⑨俳句⑩短歌

なお、大学生(先述の名大生)の場合も参考までに並べてみると次のようである。

(男子) ①随筆②記録③評論④通信⑤詩⑥説明
 (女子) ①随筆②記録③詩④説明⑤評論⑥通信

(F) 「作文についてどのような指導を望むか」

中学・高校別に、要望の内容を分類して、それぞれ主なものをあげてみる。

[中学生] ①「具体的な表現技術をわかりやすく説明してほしい」②「作文の時間を多くして十分に書かせてほしい」③「全員の作品を読み合わせしてほしい」④「点数や記号で評価するだけでなく、文で批評して

ほしい」⑤「先生も書いて手本を示してほしい」⑥「個人別に指導してほしい」等。

〔高校生〕①「書く機会を多くしてほしい」②「書きたいことを自由に書かせてほしい」③「表現方法の基本的な知識や技術を身につけさせてほしい」④「点数や記号でなく、悪い点をはっきり指摘し、批評のことは書いてほしい」⑤「書きたい気持ちが起るようになってほしい」⑥「他人の作品を多く読み、批評し合えるような機会をつくってほしい」⑦「文章の内容に干渉しないでほしい」等。

以上、アンケートの結果を通して、作文に対する生徒の意識の傾向をみてくると、指導の現状が必ずしも生徒の実態に即しているとはいえないことをあらためて感じさせられる。望ましい作文教育とは、どんな文章をどのように書かせることなのか。不備な教育条件の中で、効果的な指導の糸口を模索するためには、こうした資料を検討してみることが大切であろう。

2 中学生・高校生に対する「聞き書き」の指導 — 表現意欲の喚起をめざして —

(1) 指導の目的

上記のような生徒の実態を踏まえ、作文に対する生徒たちの関心や意欲を喚起する有効な方法はないものかと模索した結果、いわゆる「聞き書き」の方法に着目し、書くことの興味、自信を体得させるために、書かずにはおられないような題材を発見させることから始めてみようと考え及んだ。「聞き書き」の方法は、生徒が主題を決め、積極的に取材活動を行うのに適していると思われる。また自ら取材した身近で興味深い題材を記録文又は報告文として表現することは、生徒たちが苦手とする構想の面でも実行しやすいと考えられる。このように生き生きした取材活動に主眼をおいた記録文・報告文の指導を通して、その効果や可能性を追求し、中学・高校における作文教育実践の自信を得たいと考えたのである。

(2) 指導の経過

49年度の名大附属高校2年生に対して、自由作文を夏休み中の宿題として指示した時、関心のある者は「聞き書き」による記録文・報告文を書くように奨励してみた。その際、「現代国語」教科書(筑摩)の教材になっていた生徒作品を参考文として指導した。2学期の初めに生徒数の $\frac{1}{4}$ に近い約30名が、「聞き書き」の作品を提出した。○「祖母の学校時代」○「祖父の歩んだ道」○「父の戦争体験」○「母の戦時中の生活」○「伊勢湾台風の記録」等々の作品を読み、私はそれらの文章の生き生きとした内容と表現に目を見張る思いであった。読書感想文等他の自由作文に比べてひときわ精彩を放っているように思われた。

そこで、50年度は49年度の成果を基にして、名大附属中学2年生および同高校2年生の全員を対象として、より計画的に「聞き書き」の指導を実施することにした。50年度の1学期に行った指導は主として次のようなことである。中2・高2とも教科書の作文単元の学習と関連させ、最も具体的な例文として、49年度本校高2生徒の「聞き書き文集」から数編の代表的作品を選んで印刷し、生徒全員に配布した。例文により、記録文や報告文の特徴を考えさせ、主題の決め方、取材のし方、文章の構成、記述上の注意点等を説明し、各自に検討もさせた。その他、事前指導として次のことを行った。○話題提供者の依頼○取材のため質問し話を聞く心構え、礼儀、技術、○メモのとり方、録音機の活用、○原稿用紙の正しい使い方等。そして、夏休み中の宿題として、各自又は共同で1編の作品を書いて提出するように指示した。(なお、別に例年通り読書感想文を中心とする自由作文も1編ずつ宿題とした。)

9月中旬にはほとんど全員の作品が提出され、2学期から3学期にかけて全作品に目を通し、誤記その他表現上不備な箇所を訂正し、また、簡単な評語や評価を記入したうえ、一旦生徒に返却した。そして、生徒の手で最終的に推敲させ、3学期には代表的作品を選んで「聞き書き文集」として編集した。

なお、2学期末には、「聞き書き」に対する生徒の意識を知るため、アンケートを実施した。

(3) 指導の成果 — 生徒作品の概要 —

提出された「聞き書き」の作品は、中学生77編、高校生120編であった。その中には、2名以上数名の共同作品10余編もふくまれている。以下、これらの作品の全体的な傾向について述べてみたい。

(A) 話し手(話題提供者)に選ばれた人

〔中学〕父(28)、母(18)、父母(7)、祖母(9)、祖父(2)、おじ・おば(3)、その他(10)。

〔高校〕母(32)、父(20)、父母(2)、祖母(12)、祖父(7)、祖父母(2)、曾祖母(1)、おじ(3)、兄・姉(2)、その他(39)。

父・母が最も多く、合わせると中学生の場合70%、高校生の場合45%に及ぶ。次いで祖父・祖母が多く、中学生の場合14%、高校生の場合20%である。したがって「聞き書き」の主題も当然父・母を中心とする肉親の体験談が主となる。

(B) 内容の特徴

中学生・高校生とも同様の題名(主題)が多いので、中・高の別なく、主な題名を列挙してみたい。

○父の少年時代○父の中学時代○16歳の父○父の高校時代○父の青春○父の学徒動員○父の軍隊生活○父の戦争体験○終戦と父○母の少女時代○母の小学時代○母の疎開生活○14歳頃の母○母の女学校時代○戦時

下の青春○母の戦争体験記○両親の青春時代○戦時中の父母○母の台湾生活○上海の日本人○祖父と海○祖父の道○一枚の家系図○祖父の関東大震災体験記○昭和初期の学生生活○祖母の $\frac{3}{4}$ 世紀を尋ねて○祖母の戦争体験○祖母の欧州旅行記○祖母の子ども時代○祖母の育った大須○曾祖父のこと○テニスの好きな祖母○三河地震○名古屋大空襲○ぼくの聞いたヒロシマ○長崎の被爆者○伊勢湾台風○三河の民話○岡山の民話○松本で聞いた民話○わが小学校の歴史を聞く○藤村記念館にて○福祉会館を訪ねて○看護婦さんに聞く○ある登山家を訪ねて○有松しほり○飛騨春慶塗について○大平街道○ベトナム○ブラジルのこと、等々。

題名でわかるように、戦時中の体験に関する内容が多い。そのような作品が中学生の57%、高校生の39%を占めている。肉親の切実な体験を詳しく聞いたことにより、戦争や平和の問題に対する認識を新たにしたり、父母や祖父母に対する敬愛の念を深めたりしたという感想が多い。また、祖父母からの話題は年輪を経た深い魅力を感じさせるものが多く、生徒のしみじみ聞き入る様子が目に見えるようである。話し手が切実な体験を語る時の迫力は聞き手の心を強く動かす。そして聞き手の真剣な表情や質問がますます話題をゆたかにし、生き生きとさせるのであろう。

紙面の余裕がなく、具体的な作品をそのまま紹介することができないので、話し手と聞き手の表情や気持がよくうかがわれるような一節をいくつか抜き出して、次に記すことにしたい。

○「この話をしている時の母は、時には目を閉じてしみじみと話し、うれしそうでした。」(中・女)○「つねに、物を大切に、”もったいない使い方をしないこと”と口ぐせのように言う母の気持も少しはわかってきた。」(中・男)○「親子の断絶が言われる今の時代に、私は両親の苦勞をもっと深く真剣に考えて、両親の胸にとびこんでゆきたい。」(中・女)○「話し終わった祖母の顔は心なし、ひどく疲れたように思えました。戦争の残酷さ、その時の苦勞をことばでくり返しているうちに、その時の経験がずっしりと心にうかんできたのでしょうか。」(中・女)○「祖母の顔には今までの苦勞を刻みこんだしわと共に、時代の波にもまれながらも、それを乗り越えてきた満足感が見られる。」(中・女)○「母が私に話す時、とても楽しそうでした。さすがに祖父や兄のことを話す時は涙声になりましたが、その時代に生きた人の心の中からいまいましい、悲しい記憶は決して消えることはないでしょう。消えてほしいとは思いません。言えるのは、その頃の分を今からでもいい、とりもどそうと努力してほしいということです。」(高・女)○「九死に一生を得た父は、”運がよかった、いや悪かったのかな”とにが笑い

をした。父の目からはついに涙がこぼれた。」(高・女)○「苦難の生活を乗り越えてきた父、今は腹の出た父を横目でみながら、わずかばかりの敬意を表するほくだった。」(高・男)○「ぼくは今まで母のこんなつらい体験は聞いたことがなかった。母だってこんな苦しい体験は思い出したくなかったにちがいない。この作文のために、思い出してもらったことをすまなく思っている。」(高・男)○「このことはあなただけでなく、あなたの子どもにも知って欲しいネェと母。……生身の人間の口から口へと、縦にも横にもふくらみをもった形で、後の人に伝えることが大切なのだ。戦争の側面を知るために母の話聞いて本当によかった。」(高・女)

(C) 表現上の特徴と問題点

作品の長さについては、字数で示すと、中学生の場合、平均約1800字、高校生の場合、平均約3000字であった。最も長いものは、中学生、約4000字、高校生、約10,200字(3人の共同作品)であった。中学生・高校生とも、これだけ長い文章を書くのは初めての経験だったという者が多い。題材の豊富さと、それに対する強い関心が長い文章を書かせたといえるであろう。

文章の記述上の欠点として最も目立ったことは、段落の不適切なものが多いということである。中学生の約40%、高校生の約30%が該当した。構想の基本的な指導として、段落意識を養うことの重要性を感じさせられる。なお、誤字(漢字と仮名遣い)は中学生・高校生とも平均4字程度であった。誤りやすい文字の傾向があるので、それらの文字を記録しておき、以後折にふれ注意しながら指導することになっている。

(4) 「聞き書き」に対する生徒の意識

各自に作品を返却し最終的に推敲させた時点で、「聞き書き」に対する生徒の意識を調査した。次にそのアンケート(1975, 12実施)の結果を記してみよう。

(A) 「聞き書きに対して興味を感じたか」

	中 2			高 2		
	男	女	計	男	女	計
非常に興味を感じた	5	1	6	6	2	8
かなり興味を感じた	7	9	16	16	19	32
あまり興味を感じなかった	8	6	14	18	16	34
全く興味を感じなかった	8	7	15	13	0	13
わからない	15	17	32	29	18	47
生徒数	43	40	83	79	55	134

「非常に」又は「かなり」興味を感じた者は、中学生25%、高校生30%、「あまり」又は「全く」興味を感じなかった者は、中学生・高校生ともに35%である。なお、「聞き書き」を以前に経験したことのあった者

は、中学生10%、高校生15%で、大部分の者にとっては初めての経験であった。先述の「作文に対してどの程度興味があるか」の結果と比較して、「興味を感じなかった」者の数が比較的少い傾向は多少評価できるかもしれない。

「どんな点に興味を感じたか」についての回答を整理してみると次のようになる。

第1は、取材した話題の内容に対する興味・関心である。○「人の体験や苦勞がしみじみわかった。」○「戦争のことを知り胸をうたれた。」○「知らない世代との接触により歴史的なおもしろさを感じた。」○「母の現在の気持や生活態度の根拠がこんなところにあったのかということを知った。」等。

第2は、取材活動に対する興味である。○「インタビューということに初めて関心をもった。」○「一つのことを聞き出すために、内容的に不十分なところをすぐ質問して補う技術のおもしろさを知った。」○「話してくれた人の様子が日頃と違って感じられた。」○「日常生活の身近に題材となることがいくらかでもあることを知った。」○「普通聞き流してしまうようなことばを注意深く聞くことができた。」等。

第3は、文章表現に対する興味である。○「人の話しことばをどうやって書きことばに変えていくか、細かいニュアンスをどうやって読む人に伝えるかに関心をもった。」○「自分の意見を述べるだけでなく、話し手の意見と比べることができる。読書感想文とそういう点では似ている。しかし読書感想文は対象がすでに書かれている文中の意見であるのに対して、これは相手が生きた人の直接の話だから楽しい。」○「口述は体系だっていないが、この機会に貴重な記録を作ることができてよかった。」○「情報処理能力のようなもの——要点を簡潔にまとめる能力の必要性を知った。」等。

(B) 「聞き書きに対して困難を感じたか」

	中 2			高 2		
	男	女	計	男	女	計
非常に難しかった	8	4	12	7	2	9
かなり難しかった	11	15	26	22	14	36
あまり難しくなかった	15	12	27	14	20	34
全然難しくなかった	3	2	5	8	3	11
わからない	6	7	13	28	16	44
生徒数	43	40	83	79	55	134

「非常に」又は「かなり」困難を感じた者は、中学生46%、高校生34%、「あまり」又は「全然」困難を感じなかった者は、中学生39%、高校生34%である。

「どんな点に困難を感じたのか」についての回答を整理し、主なものを記してみよう。

第1は、聞いた話題を整理して文章化する際の困難点である。○「要点をよくつかんで、それを他の人によく分かるように書くことがむずかしい。」○「相手の口調とか物腰までふくめて忠実に表現することができない。」○「自分の意見と聞いた内容との調和がとりにくい。主観をどこまで入れてよいかわからない。」○「文末が“—だそうです”ばかりだと読みにくい。現在形にしたり過去形にしたりする文体が難しい。」○「何べんも同じことが出てきたり、話が前後したりするのでまとめるのに苦勞した。」等。

第2は、取材に際しての困難点である。○「どんなことをだれに聞くのかということ——そのきっかけがうまくつかめない。」○「知りたいと思うことについて、やさしくていねいに話してくれる人を見つけ出すことが難しい。」○「古い話題なので、その時代の状況がわかりにくかった。」○「あらたまって話を聞くことがはずかしかった。」○「どの程度まで突っ込んで聞いていいのか判断に迷った。」○「聞きながらメモをとることがうまくできない。」等。

(C) 「聞き書きに際して、特にどんな点に配慮すべきだと思ったか」

この質問に対する回答の内容は、上記の困難点と非常に関連している。整理すると次のようである。

第1に多い意見は、構想に関するものである。○「聞いた話の内容の中で一番中心になることをしばってまとめあげることが必要だ。」○「内容を要約し、わかりやすく順序だてて並べるべきだ。」等。

第2に多い意見は、取材と礼儀作法に関するものである。○「話を聞く前に聞きたいことをよく考え、範囲をしばっておくことが必要だ。」○「事前に連絡して了解を得ておくこと、また、相手の気を悪くさせないように質問することが大事だ。」○「相手の体験談をしっかりと聞くと共に、当時の社会的状況や本人の心境もできるだけとらえることが必要だ。」○「関心のある問題については納得のゆくようにとことんまで聞くべきだと思う。」○「相手のプライバシーに関したことはあまり聞くべきでない。」○「話し手の顔を見てまじめに聞くようにすべきだ。」○「礼儀正しくして相手の迷惑にならないように話を聞くべきだ。」等。

後 記

以上、表現意欲の喚起をめざした「聞き書き」指導について述べたが、この指導の試みは、私にとって非常に興味深い経験であった。生徒たちそれぞれの文章の中から生き生きとした関心や表現意欲を読みとることができた。生徒各自の積極的な努力を高く評価したい、と同時に各作品のために話し手となってくださったかたがたに心から感謝したい気持である。「聞き書き」

は、話し手と聞き手との、いわば呼吸の合った協力によって可能であり、その作品の良否はむしろ聞き手の関心をひきつける話し手の話題や話術に負うところが大きいと思われる。

取材活動に重点を置く作文指導を今後も継続的に工夫し、できれば日常生活の中で主題を探り題材を求めるような習慣を身につけさせたいと思う。作文における一番の困難点とされる構想に関しても、興味深い題材に即して基本を指導することが効果的だと思われる。しかし、「聞き書きの経験を通じて、自分の作文力に自信がついたか」という質問に対して、「非常に」又は「かなり」自身がついたと答えた者は、中学生14%、高校生8%であり、中学生・高校生とも大半の者は「自信がついたとは言えない」と答えている。作

文に興味や自信をもたせることは一朝一夕にしてできるものではなさそうである。できるだけ多くの機会を設け、さまざまな方法で作文指導を重ねてゆくより他にない。

教育課程審議会の「教育課程の基準の改善に関する基本方向について(中間まとめ)50, 10」には、小学・中学・高校を通じ、「表現力特に作文力を高めることに留意して内容の改善を図る」旨が述べられている。これが単なる掛け声に終ることなく、生徒の実態に即した作文教育が生き生きと推進されるために、根本的な改善と教育条件の充実が実現されることを期待する。

<付記>この研究に当っては、昭和50年度文部省科学研究費(奨励研究費B)の交付を受けた。